

Broyden 法

春日 悠

2016 年 4 月 17 日

目次

1 ニュートン法	1
1.1 ニュートン法	1
1.2 多変数関数の方程式系の場合	2
2 Broyden 法	2
2.1 セカント法	2
2.2 Broyden 法	3

1 ニュートン法

1.1 ニュートン法

次の方程式を満たす x を数値的に求めることを考える。

$$f(x) = 0 \tag{1}$$

繰り返し計算により x を求めるとしよう。 k 回目の計算により求まる x を x_k と表す。
 $k+1$ 回目の x である x_{k+1} は、次式で求められるものとする。

$$x_{k+1} = x_k + \Delta x_k \tag{2}$$

関数 $f(x)$ を x_{k+1} についてテーラー展開すると、次のようになる。

$$f(x_{k+1}) = f(x_k + \Delta x_k) = f(x_k) + f'(x_k)\Delta x_k + O(\Delta x_k^2) \tag{3}$$

$k+1$ 回目で x が方程式を満たすとすると

$$f(x_k) + f'(x_k)\Delta x_k + O(\Delta x_k^2) = 0 \tag{4}$$

左辺第 3 項を無視して

$$f(x_k) + f'(x_k)\Delta x_k \approx 0 \tag{5}$$

これより次式を得る .

$$\Delta x_k = -\frac{f(x_k)}{f'(x_k)} \quad (6)$$

以上より , x の更新式として次式が得られる .

$$x_{k+1} = x_k - \frac{f(x_k)}{f'(x_k)} \quad (7)$$

上式で方程式を解く方法をニュートン法という .

1.2 多変数関数の方程式系の場合

次の方程式系をニュートン法で解くことを考える .

$$\begin{aligned} f_1(x_1, x_2) &= 0 \\ f_2(x_1, x_2) &= 0 \end{aligned} \quad (8)$$

k 回目の x_1, x_2 をそれぞれ x_1^k, x_2^k と表す . 各変数の更新式は次のように表される .

$$\begin{aligned} x_1^{k+1} &= x_1^k + \Delta x_1^k \\ x_2^{k+1} &= x_2^k + \Delta x_2^k \end{aligned} \quad (9)$$

$k+1$ 回目の変数で各関数をテーラー展開すると , 次のようになる .

$$\begin{aligned} f_1(x_1^{k+1}, x_2^{k+1}) &= f_1(x_1^k, x_2^k) + \frac{\partial}{\partial x_1} f_1(x_1^k, x_2^k) \Delta x_1^k + \frac{\partial}{\partial x_2} f_1(x_1^k, x_2^k) \Delta x_2^k \cdots \\ f_2(x_1^{k+1}, x_2^{k+1}) &= f_2(x_1^k, x_2^k) + \frac{\partial}{\partial x_1} f_2(x_1^k, x_2^k) \Delta x_1^k + \frac{\partial}{\partial x_2} f_2(x_1^k, x_2^k) \Delta x_2^k \cdots \end{aligned} \quad (10)$$

右辺第 4 項以降を無視するとして , 上式をベクトルと行列の形で表すと

$$\begin{pmatrix} f_1(x_1^{k+1}, x_2^{k+1}) \\ f_2(x_1^{k+1}, x_2^{k+1}) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} f_1(x_1^k, x_2^k) \\ f_2(x_1^k, x_2^k) \end{pmatrix} + \begin{bmatrix} \frac{\partial}{\partial x_1} f_1(x_1^k, x_2^k) & \frac{\partial}{\partial x_2} f_1(x_1^k, x_2^k) \\ \frac{\partial}{\partial x_1} f_2(x_1^k, x_2^k) & \frac{\partial}{\partial x_2} f_2(x_1^k, x_2^k) \end{bmatrix} \begin{pmatrix} \Delta x_1^k \\ \Delta x_2^k \end{pmatrix} \quad (11)$$

ベクトル・行列表記では次のように表せる .

$$f(x_{k+1}) = f(x_k) + J(x_k) \Delta x_k \quad (12)$$

ここで $J(x_k)$ をヤコビ行列という . もとの方程式系は次式のように表される .

$$f(x) = 0 \quad (13)$$

これを x_{k+1} が満たすとすると , 次式が得られる .

$$J(x_k) \Delta x_k = -f(x_k) \quad (14)$$

上式を Δx_k について解くことにより , x を更新することができる . 3 変数以上の方程式系でも同様である .

2 Broyden 法

2.1 セカント法

ニュートン法の問題点は、関数の微分が必要なことである。そこで、関数の微分を近似することを考える。関数の微分に近似を用いるニュートン法を準ニュートン法 (quasi-Newton method) という。

次の方程式の解を求めることを考える。

$$f(x) = 0 \quad (15)$$

ニュートン法では次式で x を更新する。

$$x_{k+1} = x_k - \frac{f(x_k)}{f'(x_k)} \quad (16)$$

ここで、 $f'(x_k)$ を次式で近似する。

$$f'(x_k) \approx \frac{f(x_k) - f(x_{k-1})}{x_k - x_{k-1}} \quad (17)$$

これにより、 x の更新式は次式のようになる。

$$x_{k+1} = x_k - \frac{x_k - x_{k-1}}{f(x_k) - f(x_{k-1})} f(x_k) \quad (18)$$

この方法をセカント法 (secant method) という。

セカント法は関数の微分が不要であるが、初期値を 2 つ必要とする。

2.2 Broyden 法

次の方程式系をセカント法で解くことを考える。

$$f(x) = \mathbf{0} \quad (19)$$

変数 x は次式で更新される。

$$x_{k+1} = x_k + \Delta x_k \quad (20)$$

ニュートン法の場合、 Δx_k は次式で得られる。

$$J(x_k) \Delta x_k = -f(x_k) \quad (21)$$

ヤコビ行列 $J(x_k)$ の近似行列を B_k とすると

$$B_k \Delta x_k = f(x_k) \quad (22)$$

ここで、右辺の負号は邪魔なので B_k の中に入れてしまっている。次の繰り返し計算におけるヤコビ行列 $J(x_{k+1})$ に対する近似行列 B_{k+1} をセカント法同様に近似することを考えると、次式のように表される。

$$B_{k+1} \Delta x_k = \Delta f_k \quad (23)$$

ここで、 $\Delta f_k = f(x_k) - f(x_{k-1})$ である。上式では B_{k+1} は一意に決まらないので、条件を適当に与えてやる必要がある。

上式の両辺から $B_k \Delta x_k$ を引くと

$$(B_{k+1} - B_k) \Delta x_k = \Delta f_k - B_k \Delta x_k \quad (24)$$

右辺を $A x_k$ の形にしてやれば、 $B_{k+1} = B_k + A$ となって B_{k+1} を B_k の修正によって求めることができる。単純に考えると、両辺に $\Delta x_k^T \Delta x_k$ をかけてやればよい。

$$\begin{aligned} (B_{k+1} - B_k) \Delta x_k \Delta x_k^T \Delta x_k &= (\Delta f_k - B_k \Delta x_k) \Delta x_k^T \Delta x_k \\ (B_{k+1} - B_k) \Delta x_k &= \frac{(\Delta f_k - B_k \Delta x_k) \Delta x_k^T \Delta x_k}{\Delta x_k^T \Delta x_k} \end{aligned} \quad (25)$$

以上から、次式が得られる。

$$B_{k+1} = B_k + \frac{(\Delta f_k - B_k \Delta x_k) \Delta x_k^T}{\Delta x_k^T \Delta x_k} \quad (26)$$

ヤコビ行列の近似式を上式で計算する準ニュートン法を Broyden 法という [2]。上の式は、 Δx に直交するベクトル q を両辺にかけると $B_{k+1} q = B_k q$ となるような条件を課していることになっている。

欲しいのは Δx_k なので、必要なのはヤコビ行列よりはその逆行列である。そこで、 B_{k+1} の逆行列を求めてみる。

ここで、次のような形の行列を考える。

$$B = A + uv^T \quad (27)$$

次の式を満たすベクトル x があるとする。

$$Ax = u \quad (28)$$

このとき

$$\begin{aligned} Bx &= (A + uv^T)x \\ &= Ax + uv^T x \\ &= u + (v^T x)u \\ &= (1 + v^T x)u \end{aligned} \quad (29)$$

これより、次式が得られる。

$$B^{-1}u = \frac{1}{1 + v^T x} A^{-1}u \quad (30)$$

上式の両辺から $A^{-1}\mathbf{u}$ を引くと

$$\begin{aligned}
 (B^{-1} - A^{-1})\mathbf{u} &= \left(\frac{1}{1 + \mathbf{v}^T \mathbf{x}} - 1 \right) A^{-1}\mathbf{u} \\
 &= -\frac{\mathbf{v}^T \mathbf{x}}{1 + \mathbf{v}^T \mathbf{x}} A^{-1}\mathbf{u} \\
 &= -\frac{A^{-1}\mathbf{u}\mathbf{v}^T \mathbf{x}}{1 + \mathbf{v}^T \mathbf{x}} \\
 &= -\frac{A^{-1}\mathbf{u}\mathbf{v}^T A^{-1}\mathbf{u}}{1 + \mathbf{v}^T A^{-1}\mathbf{u}}
 \end{aligned} \tag{31}$$

これより次式を得る .

$$(A + \mathbf{u}\mathbf{v}^T)^{-1} = A^{-1} - \frac{A^{-1}\mathbf{u}\mathbf{v}^T A^{-1}}{1 + \mathbf{v}^T A^{-1}\mathbf{u}} \tag{32}$$

これを Sherman-Morrison の公式という .

上の公式を用いると , B_{k+1} の逆行列は次式で表される .

$$B_{k+1}^{-1} = B_k^{-1} + \frac{(\Delta \mathbf{x}_k - B_k^{-1} \Delta \mathbf{f}_k) \Delta \mathbf{x}_k^T B_k^{-1}}{\Delta \mathbf{x}_k^T B_k^{-1} \Delta \mathbf{f}_k} \tag{33}$$

もう少し直接的に B_{k+1}^{-1} を求める方法もある . B_{k+1}^{-1} について , 次式が成り立つ .

$$B_{k+1}^{-1} \Delta \mathbf{f}_k = \Delta \mathbf{x}_k \tag{34}$$

これについて , B_{k+1} の式を求めたのと同様の手順で B_{k+1}^{-1} の式を求めると , 次式が得られる .

$$B_{k+1}^{-1} = B_k^{-1} + \frac{(\Delta \mathbf{x}_k - B_k^{-1} \Delta \mathbf{f}_k) \Delta \mathbf{f}_k^T}{\Delta \mathbf{f}_k^T \Delta \mathbf{f}_k} \tag{35}$$

ただし , Broyden によると , この式はあまりよろしくないらしい [2] .

実際の問題に Broyden 法を適用する場合 , B_k , B_k^{-1} のどちらを用いるにしても , それらの初期値を与える必要がある . 初期値は単位行列にするか , 何かしらの方法で求めたヤコビ行列の近似値を与える . また , 最初だけヤコビ行列をきちんと計算するという方法もある . この場合は微分を避けるというより , それ自体手間のかかるヤコビ行列の計算を避けるために Broyden 法を用いる .

参考文献

- [1] 戸川隼人 : UNIX ワークステーションによる科学技術計算ハンドブック , サイエンス社 (1998) .
- [2] C.G.Broyden : A Class of Methods for Solving Nonlinear Simultaneous Equations , Mathematics of Computation , 19 (92) , 577-593 (1965) .